

地域遺産の利活用に向けた記憶の共有化に関する試み
～鹿児島県始良市の山田橋に関する歴史紙芝居実演を通して～

第一工業大学 学生会員 ○新垣健児
第一工業大学 正会員 羽野 暁

1. はじめに

地域で過疎高齢化が進む中、住民が豊かさを実感し誇りを持てる地方の創生が求められている。特に農山村地域では過疎高齢化が顕著であり、自治体財政力の低下に伴う公的サービスの画一化やコミュニティの弱体化により、地域らしさを有する風景の崩壊が進んでいる。土木学会では歴史的構造物を選奨土木遺産に認定し、まちづくりへの活用を促している。現在、農山村地域に残る大正～昭和初期に建設され地域の近代化を担った「地域橋梁」は、地域の活性化に資する貴重な地域遺産であるが、都市化とともに各地で架け替え撤去が進められている。都市化が遅れた農山村地域にわずかに残るこれらの地域橋梁を活性化の核に据えて、当該コミュニティの結びつき強化や風景のアイデンティティ確立を図ることは、地方創生の一助になるであろうと考える。

本稿は、鹿児島県の農山村地域に残る地域橋梁のひとつである山田橋を対象として、オーラル・ヒストリー調査により得られた歴史情報をもとに分かりやすい歴史紙芝居を制作し、同地域の小学校にて実施した紙芝居実演について報告するものである。

2. 山田橋に関するオーラル・ヒストリー調査

鹿児島県始良市下名に残る山田橋（写真-1）を対象として、地域に居住する古老を中心に平成 26～27 年度にヒアリング調査を実施した。結果として、既往の文献資料にない歴史情報を含め、①先代の木橋、②新橋建設の経緯、③建設工事の状況、④竣工後の山田橋、⑤戦時中の5項目に関する歴史情報を得た（表-1）。



写真-1 山田橋の全景と親柱・高欄

項目	ヒアリング調査内容
① 先代の木橋	1-1: 先代山田橋は現山田橋より10m上流側に架かっていた 1-2: 昭和2年に山田川の大洪水により木橋の半分が流失した 1-3: 人が渡れる仮橋を設けたが高等馬車は通れなかった
② 新橋建設の経緯	2-1: 県議会議員の瀬戸山良敏氏が新橋の建設に尽力した 2-2: 県内一の橋を造ろうという思いがあり橋灯をつけた
③ 建設工事の状況	3-1: 現場監督は桜島から来た白川氏 3-2: 建設用の松板や松杭などの木材は原口氏の製材所が調達した 3-3: 建設現場は毎日大勢の人間でにぎわった 3-4: 帖佐松原の塩田事業に従事できない人が山田橋建設現場に出稼ぎに来ていた 3-5: 帖佐松原からの出稼ぎ労働者は女性が多く、エンヤコーラの掛け声で橋梁の基礎づくりに携わった(ヨイトマケ労働者)
④ 竣工後	4-1: 竣工時には親子3代での渡し初め式を行った 4-2: 山田橋の橋灯は電燈であった 4-3: 山田橋から凱旋門に至る新馬場の通りは商店で賑わっていた 4-4: 山田橋から寺脇の通りは職人の店で賑わっていた 4-5: 周辺には旅館が営業しており、高等馬車の停留所があった 4-6: 新馬場通りでは十五夜の綱引き大会が開催されていた
⑤ 戦時中	5-1: 山田橋は米軍の攻撃標的にされた 5-2: 爆弾投下を受けたが、橋には命中せず橋脚の横に落ちた 5-3: 山田橋の橋灯と橋名板は、戦時中に撤収された

表-1 山田橋に関するオーラル・ヒストリー調査結果

3. 山田橋の歴史に関する紙芝居制作と実演

地域の高齢者と子供が地域の土木構造物に関する歴史や記憶を共有する世代間交流の場として、山田橋の歴史紙芝居実演会を企画、開催した。紙芝居実演により、地域住民が地域の土木構造物に関する思い出を共有することで、土木構造物に対する愛着の醸成を試みた。

(1) 紙芝居の制作（図-1）

a) ラフストーリーと場面割り

オーラル・ヒストリー調査によって得た歴史情報をもとに、山田橋を舞台として、山田橋の紹介、登場人物の紹介、山田橋を中心とした当時のにぎやかな生活状況、山田橋の建設経緯と施工時の苦労、地域の施設と山田橋の関係、戦時中の悲しい記憶と戦後の楽しい記憶が伝わるラフストーリーを作成し場面割りを実施した。

b) 登場人物のキャラクター設定

主人公は、紙芝居実演会に参加する小学生が感情移入しやすいよう地域の小学校に通う小学生とした。山田橋架橋位置の地名(下名地区)から、名前を下名豊君とした。主人公に歴史を紹介する人物として、歴史爺さんを設定し、さらに、山田橋への愛着の醸成を期待して、自らの思い出を語る山田橋を擬人化した山田橋君を設定した。

c) 紙芝居シートの作成

下書き絵をもとに wacom 社製ペンタブレット「Intuos comic」を使用して紙芝居シートをデジタル化し色付けし

